

## 学生寮における自主防災組織の構築

古田皓晟<sup>\*1</sup>・中野友暉<sup>\*1</sup>・佐藤美紀<sup>\*2</sup>・鈴木正樹<sup>\*3</sup>

### Formation of Voluntary Disaster Prevention Organization in the Student Dormitory

FURUTA Kosei<sup>\*1</sup>, NAKANO Yuki<sup>\*1</sup>, SATO Miki<sup>\*2</sup>, SUZUKI Masaki<sup>\*3</sup>

**Abstract:** The dormitory students' association of Numazu National College of Technology has been building its own disaster prevention organization with the help of students in order to create a safe environment for the dormitory students. In this paper we report about overview of the disaster prevention organization that was built by student.

Key Words: Student Dormitory, Voluntary Disaster Prevention Organization

#### 1. はじめに

沼津高専学生寮は、教育寮でありながら、自治寮の側面を持ち、在寮する学生（以下、寮生）が主体となって寮の運営を行っている。寮生の日常生活は、寮監をはじめとする寮事務職員や寮務担当教員、宿直教員のサポートの下に寮生会役員によって支えられている。

一刻を争う救命・救助の現場では第一発見者の行動が、要救助者の救命率に大きく関わり、火災や地震の際には個人個人が最適な避難路を的確に判断するとともに、不明者の確認を迅速に行う必要がある。このような緊急時の初期対応は、場合によっては寮生会役員になることが想定される。別の言い方をすれば期待されているともいえる。そのため、本校寮生会では寮生一人一人が防災や救命意識を持ち、教職員の目が届きにくい寮内であっても救急救命活動及び非常時対応を寮生のみで行える体制の構築を目指してきた。また、災害発生時には周辺地域全体で、救助、避難所運営、復旧等に取り組むことで、被害を最小限に抑えられると考えられることから、周辺地域と相互に協力関係を得られるような体制を構築する取り組みを行ってきた。

本小文では、筆者がこの4年間に行ってきた寮内および周辺地域における防災と救命活動に関する取り組みについて、その概要を報告する。また、後輩に向けて今後の展望について述べる。

\*1 機械工学科

Department of Mechanical Engineering

\*2 学生課

Student Section

\*3 教養科

Division of Liberal Arts

#### 2. 寮内における取り組み

有事の際の初期対応として、寮生会役員らにより、全寮生の安否確認および建物破損状況や2次災害等を確認することを目的に、寮内の防災組織を整備し、適切な判断による迅速な行動がとれるよう訓練を重ねている。

##### 2. 1 寮内防災組織

寮内の防災組織としては、自発的な行動に繋げるために役割を明確にし、寮生会の役職や階ごとに役割を分担した。役割と担当する役職を表1に示す。また、災害発生から本防災組織の活動開始までの流れを図1に示す。

確認活動、消火活動については自らの安全を第一に活動するよう指導を徹底している。災害発生時にこれらの役割に沿って活動を開始するのは原則、在寮者全員を運動場へ避難させてからである。

表1 寮内の防災組織

役割	担当	活動内容
災害本部	防災委員会 寮三役	全体統括 行政、消防との連絡
統括担当	その他委員会	各担当の統括 教員との連絡
安全点検	風紀 IT管理	各棟の建物被災状況確認 漏電、火災の有無の確認
安否確認	各棟棟長 総務	全寮生の安否確認 外出泊者・不明者の確認
情報収集	庶務	情報の収集・記録 交通機関の情報の収集
消火活動	各棟1階	火災発生時の消火活動
地域連携	各棟2.4階	地域の状況等の確認
避難所開設	各棟3.5階	避難所開設の補助

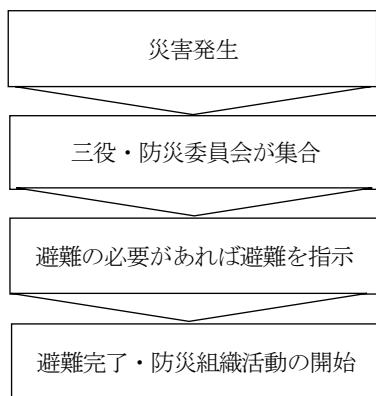


図 1 防災組織活動開始までの流れ

## 2. 2 寮内における活動

防災組織の構築以降、避難が必要になる災害は発生していないが、いつ起こるか分からない災害に対して、対応力を養うために寮内では以下のような活動を行っている。

### (1) 役員研修

春季、夏季の年二回実施する。各部署の防災組織における役割を確認し、資機材を使用する部署においては使用方法を学ぶ。また、防災組織についての話し合いの場を設け、現在の体制のブラッシュアップを行い、より良い組織を目指す。

### (2) 炊き出し訓練

2019 年度に実施。2020 年度、2021 年度は新型コロナウイルス感染予防の観点から未実施。断水、停電が発生した状況下でも寮生に食料の供給が可能になるよう、火起こし、飯盒炊飯、簡単な調理の体験を野外で有志の役員が行う。

### (3) 実践的な避難訓練

本寮で行う避難訓練は基本的に事前周知せず、抜き打ち形式で行っている。2021 年度は 5 月に行い、午前 6 時 30 分に地震が発生したことを想定し、就寝状態からの避難について確認を行った。また、火災や建造物の倒壊を想定し、訓練ごとに様々な避難経路を使用して訓練を行っている。2021 年 12 月には休日に訓練を行うことを計画しており、外出者・外泊者の確認方法や連絡方法について検討している。

## 2. 3 対応事例

避難が必要な災害こそ発生していないが、有感地震は複数回発生している。震度 1 や震度 2 の地震の際も寮長または防災委員長の両方もしくはいずれかの判断で三役・防災委員会を集合させ対応を行った事例が複数ある。以下に 2021 年 10 月 7 日に発生した地震の際の寮内の対応を記す。

地震概要：発生時刻	22 時 41 分
震源地	千葉県北西部
最大震度	震度 5 強 (マグニチュード 5.9)
長泉町震度	震度 2

22 時 41 分：地震発生。揺れが大きく感じられたことから防災委員長判断で三役、防災委員会が集合。各棟棟長、階長が迅速に避難経路の確保、身の安全を確保するよう指示。

22 時 44 分：寮三役、防災委員会が寮集会室に集合。各棟棟長から建物の被災状況、けが人の情報を収集し、宿直教員と寮務主事に地震対応を開始したことを連絡。非常放送設備で全寮に発生した地震の情報を連絡し、安全を確保できる体制でその場に待機するよう指示。

22 時 50 分：全寮生の所在を確認し、怪我人がいないことを把握、建物の被害もないことから避難の必要なしと判断。非常放送設備で被害がないことと余震に注意して生活することを全寮生に通達。宿直教員、寮務主事に被害なしであることを報告。三役、防災委員会は解散。

発災直後に棟長および階長が積極的に安全確保の指示をしていたこと、全寮生の安否確認が発災から 10 分以内に完了したことは非常に評価できると考えられる。一方で、緊急地震速報が発せられないにもかかわらず強い揺れを感じるのは今回が初めてであり、前触れなく揺れを感じた際の三役と防災委員会の集合基準が不明瞭であることが露呈した。次回の役員研修会では三役、防災委員会の集合基準を改めて検討する予定である。

## 3. 地域と連携した取り組み

寮生は昼夜共に沼津高専で生活を送る為、災害時に寮生の若い力が地域の力になるという寮生の声により、2018 年度から地域防災に力を入れている。防災委員長及び寮三役が年 6 回行われる地域の避難所運営会議に出席し、地域の人たちと一緒に災害時の行動について話し合う他、総合防災訓練の計画、避難所運営マニュアルの作成などを行っている。さらに、地域の人たちに対して、避難所となる沼津高専敷地内の案内や地域住民との合同防災訓練を寮生会全体で実施し、地域住民と寮生が一体となって、防災意識の向上や災害への備えを行っている。

### 3. 1 地域と連携した防災組織

沼津高専寮生会は沼津高専避難所運営委員会という地域防災組織に所属することで地域と連携した防災活動を行っている。図 2 に沼津高専避難所運営委員会の組織図を示す。沼津高専避難所運営委員会は沼津高専を避難所とする北小林自治会、南小林自治会、柏葉尾自治会、小林団地自治会、南小林団地自治会の代表者 6 名により組織されている。各自治体の自治会長は沼津高専避難所運営本部の副本部長となる。副本長は構成団体の協議により輪番制で選出している。また、消防団経験のある地域住民の方が指導員となり、より適切な避

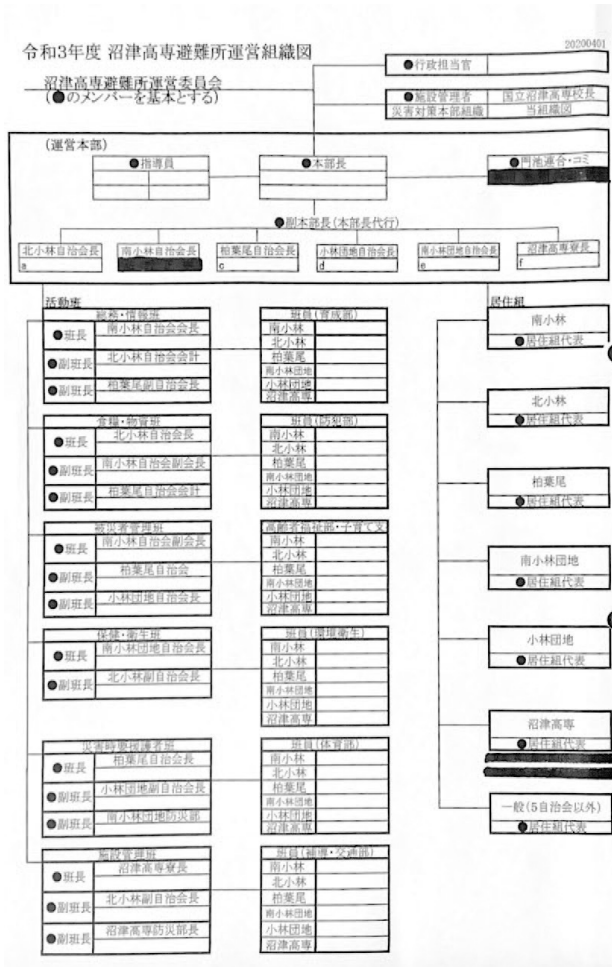


図2 沼津高専避難所運営組織図

避難所運営や救助活動についてのアドバイスを行っている。各自治体の代表者は総務情報班、食食物資班、被災者管理班、保健衛生班、災害時要援護者班、施設管理班に別れて活動を行う。この組織の中で沼津高専寮生会が1つの自治会として組み込まれ、寮三役と防災委員長が構成員となる。寮長は各自治会長と同様の扱いで副本部長となる。この体制により、寮生が避難所運営にボランティアではなく役員として根幹からかかわることができるため、地域との繋がりを深めるだけでなく、有事の際にはより積極的に行動できるようになっている。

### 3.2 地域防災組織における寮生の活動

平時には、前述の避難所運営会議の他に地域清掃事業などへも参加している。有事の際には、以下の(1)から(3)に記す活動を行うことを予定している。なお、地域防災活動への参加は、寮生全員の安否確認が終了してから行われることが原則である。すなわち、寮内に要救助者がいる場合や寮敷地内で火災が発生した場合などは沼津高専避難所運営に連なる本部役員であっても寮内での活動を優先することとしている。

#### (1) 避難所開設場所の確保

学校内の建物の位置関係を把握している寮生の利点を生かし、守衛所で鍵を借りた後、体育館や避難場所となる教室の解錠を行う。

#### (2) 避難所設営

体力のある寮生の利点を生かし、テントの設置や資機材の搬送などを行う。

#### (3) 避難所運営

受付や案内の他に、前述の班に分かれて避難所開設から閉鎖まで継続的に運営に携わる。例えば、施設管理班に属した寮生は緊急車両の誘導やリフレッシュスペースの設置などの他、避難所設備の点検や夜間の防火防犯見回りを他の自治体の構成員と協力しながら毎日行う。

## 4. 救命救急体制の構築

防災体制の構築に加え、今年度から寮生自らが救急救命活動を行える体制の構築を目指し始めた。この活動では、一般的に行われている1回30分程度のAED講習のみならず、より専門的な講習を行い、より高度な救助活動を、自信をもって行える人材の育成を目指している。この項では実際に行った救命講習と、それを受講した学生からのアンケート結果について記す。

### 4.1 救命講習

講習会に先立ち、救命活動について寮生にヒアリングを行い、現状の問題点を確認した。その結果、正しい技術を身に付けられている自信がないため処置ができるか分からない、活動前に教員に連絡しなければいけないと思っている、処置に失敗した場合の責任問題が怖い、といった懸念を寮生が抱えていることが確認された。一刻を争う救命の現場では教員の指示を待つなどして時間を失うことが救命率の大幅な低下につながるため、寮生同士で助け合える環境を作っていくことが重要である。この懸念点を踏まえ「一次救命処置に関する適切な技術を身に付け自信、勇気を持たせること」「寮生自らが一次救命処置を行う必要性を認識させること」「一次救命処置の結果傷病者の身体的機能に障害が生じても基本的に責任を問われないことを認識させること」を意識した救命救急講習会を実施することにした。

2021年10月16日富士山南東消防本部応急手当指導員である本校学生課職員の佐藤美紀が講師となり、本部役員12名を対象に救命講習を行った。これまで寮で行ってきた救命講習は30分程度の簡単なものであったが、本講習会では3時間半程度の時間を取り、全員に普通救命Iの資格を取得させた。講習は導入、学科、実技の3部構成で行った。導入では

クイズを行いながら自分が今持っている救命処置に関する知識を確認した他、沼津高専で発生した事故の事例の他、ASUKAモデルや同年代の事例に関するビデオを視聴することで、第一発見者が一次救命処置を行う必要性を理解させた。学科では傷病者の発見から救急隊への引継ぎまでの一連の手順を確認した他、手技の目的、年齢や性別に応じた AED の詳細な使用方法や、救急蘇生法と法律の関係（責任論）についても学習した。また、コロナ禍における心肺蘇生法の注意点についての説明も行った。実技では学科で学習した一連の手順を体で覚えさせるため複数回繰り返し、実践した。また、普通救命 I の資格取得のための効果測定も行った。効果測定の後には教室で実際に傷病者が発生した際のシミュレーションを行い、学生のみでの救命処置において注意する点や意識すると良い点を確認した。講習後には受講者にアンケートを行い、その有用性を確認した。

#### 4. 2 アンケート結果

受講者 12 名を対象にアンケートを実施した。

##### (1) 本日の講習はどうでしたか？

良かった 12 人

どちらでもない 0 人

良くなかった 0 人

- ・今までの講習と違い非常に分かりやすかった。
- ・話だけでなく実際に身体を動かすことで強烈にイメージすることができた。

##### (2) プログラム【導入】はどうでしたか？

良かった 12 人

どちらでもない 0 人

良くなかった 0 人

- ・実際の事例を知ることによって自分が救命処置を行う必要性を確認できた。
- ・クイズを最初に行うことで硬くならずリラックスして講習を受けることができた。

##### (3) プログラム【学科】はどうでしたか？

良かった 12 人

どちらでもない 0 人

良くなかった 0 人

- ・必要な知識を実技の前に知れたことで、救命に対する恐怖や不安をなくすことができた。
- ・死戦期呼吸はこの講習を受けなければ胸骨圧迫の必要がないと判断してしまったと思うため、受講してよかった。

##### (4) プログラム【実技】はどうでしたか？

良かった 12 人

どちらでもない 0 人

良くなかった 0 人

- ・実技を繰り返したことで自信がついた。
  - ・胸骨圧迫の大変さは実際にやってみないと分からなかった。救急隊が到着するまでの間、途中で胸骨圧迫を交代する必要性を痛感した。
- (5) 講習前のあなたと、講習後のあなた、何か変化はありますか？
- ・寮内で傷病者が発生することを役員として常に不安に感じていたが、講習を通して助けられる自信がついた。
  - ・救命は他人事と思っていたが、自分が助けなければいけないという意識が芽生えた。
  - ・救命活動をするのが恥ずかしいと思っていたが、適切な方法を学べたため恥ずかしさを感じることなく救命活動を行えるようになったと思う。

以上から、参加者全員が好印象を持ち、意識を変えることができたといえ、非常に有用性のある講習であったことが分かる。寮内に普通救命 I の資格を持った人材が 12 名居るとは他の寮生の安心感を向上させると考える。

#### 5. 今後の展開

防災組織と救命救急体制を継続して行っていくことでより安心安全な寮が作れると考える。2021 年度から防災委員会が正式な役職として認められたため、これまで有志がボランティアとして行ってきた活動がより行いやすくなった。防災委員会が今後も継続的に防災訓練や救命講習の実施、地域防災組織との連携を行っていくことを期待している。地域との繋がりを普段から強めておく事は有事の際の自助、共助に役立つと考える。また、防災だけの繋がりでなく、地域の清掃活動への参加や、寮祭での地域の方に向けた出店などを通して、さらに地域との繋がりを強化したい。また、学生が地域防災活動に役員として携わっている例は全国的に見ても珍しく、これは学生寮の利点を生かした取り組みである。この体制を、全国高専をはじめとした学生寮を保有している教育機関に広めたいと考えている。

#### 6. おわりに

4 年間の活動の結果、寮生が地域と連携した防災組織という全国的にも珍しい活動の基盤を作ることができた。寮生が安心できる環境を整えることはもちろん、寮生がいることで地域住民が安心できる環境を整えることが出来たことは大きな成果だと考える。筆者は今年度で卒業となるが、来年度以降も防災に携わる寮役員が現状に満足することなく様々な災害を想定した訓練や議論を繰り返し、より良い防災組織を構築していくことを願っている。